国　語

（国　語）

答案作成上の注意

一　解答はすべて解答用紙の指定された欄に記入しなければいけません。

二　国語は（一）ページから（二十四）ページまでです。

三　解答用紙の受験番号欄は三か所です。氏名を書いてはいけません。
　また、※印欄には何も記入してはいけません。

四　解答には筆記用具（消しゴムを含む）以外のものを使用してはいけません。

五　解答の文字は正確かつ丁寧に書きなさい。特に漢字は楷書で書き、くずし字や略字を使用してはいけません。また、字数指定がある場合は、句読点等も一字とします。

六　問題冊子と使用しない解答用紙は持ち帰ってください。

◇M3(244—191)

問題一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

『風の谷のナウシカ』(連載一九八二～一九九四年、以下『ナウシカ』)は現在から二千年以上後の遠い未来に設定されており、火の七日間という、核戦争を彷彿とさせる全面戦争の千年後を舞台としている。世界は、腐海と呼ばれる、毒の瘴気を吐く森に侵食されており、残された土地で人間たちは細々と暮らしている。人間は防毒マスクなしでこの森に入ると、たちまちに肺を冒されて死んでしまう。だがこの森は生命のない森ではなく、多くの異形の蟲たちの暮らす森であり、その蟲たちの王とでもいうべき存在が、山ほどの大きさのダンゴムシのような見た目の王蟲(オーム)である。主人公のナウシカは辺境の風の谷に暮らす王族の少女であるが、大国トルメキアと土鬼(ドルク)諸侯連合との戦争に巻きこまれ、トルメキア側について参戦することになる。

この作品は、まずは技術と自然とを対立項として設定する。ナウシカは腐海の奥底に入り、蟲たちと交流した経験から、この森の真実に気づいている。この森は人間が汚染した土壌を浄化するために生まれたものなのである。つまり、人間の技術がもたらした汚染(放射能による汚染を連想させる)を、自然が、文字通りの自然治癒力を発揮して浄化しようとしているのだ。

この作品のアニメ映画版(一九八四年)は、この技術と自然の対立を保持したまま終わっている。もしくは、ナウシカという、技術(人間による環境汚染)と自然(腐海)の対立を仲立ちする英雄の自己ギセイ①的な行為によって、当面その対立が緩和されて(しかし本質的には解決されることなく)、映画は幕を下ろしている。

しかしここで参照したいのは、この物語の原作(漫画版)である。漫画版は、A驚くべきひねりを加えることで技術と自然の対立を脱構築しているのだ。最後にあきらかにされる真実は以下のようなものである。つまり、腐海やそこに住む蟲たちは、じつは自然の産物ではなかった。火の七日間の後に、科学者たちが地球を浄化するためにつくり出した浄化装置だったのだ。さらに衝撃的なことに、ナウシカたち人間も、汚染された地球で暮らすことができるように改造された人間だったのである。その人造人間たちは、汚染に適応しているため、浄化後の世界では生きていくことができない。世界の浄化後に、その人造人間たちは死に絶え、攻撃性を取りのぞかれた人間たちにとりかえられる計画なのである。その人間たちは、墓所と呼ばれる、人間の科学知識

のつまった神殿(もしくはノアの方舟というべきか)に、胎児の形で保存されている。

ナウシカは火の七日間で世界を滅亡させた人造巨人兵器である巨神兵の母となり、巨神兵を従えてその墓所を破壊し、真実を胸の内にしまったまま人びと(つまり人造人間たち)と共に生きていく決意をする。もちろんそれは、遠い未来における人類の滅亡を確実にするかもしれない決意である。その決意の根拠とは、「人造人間たちもまた生命である」というものだ。ナウシカの感動的な台詞を引用するなら、「私達の身体が人工で作り変えられていても私達の生命は私達のものだ／生命は生命の力で生きている／その朝(世界の浄化の日)が来るなら私達はその朝にむかって生きよう／私達は血を吐きつつくり返しくり返しその朝をこえてとぶ鳥だ!!」(第七巻、一九八頁)ということだ。技術によって作られた生命もまた自然である。この宣言によって、技術と自然との区分は脱構築される。物語はナウシカが人びとに呼びかける言葉で幕を下ろす。「さあみんな／出発しましょうどんなに苦しくとも／生きねば……」(第七巻、二二三頁)。

技術と自然の脱構築とは、たとえばこういうことだ。巨大なアリ塚はアリが作ったものであるから自然であると普通は考えるだろう。それに対し、高層マンションは人間が技術の粋をこらして作ったものであるから非自然・人工であると考えるのが普通だろう。しかし、ナウシカがここで言っているのは、アリ塚と高層マンションを区別する根拠はない、ということである。その意味では高層マンションでさえも、自然だとみなせる。

さらに言えば、この『ナウシカ』の論理を［　X　］すれば、二〇一一年の福島原子力発電所のメルトダウンのあとに、「原発ぬきの電気で映画をつくりたい」という横断幕をスタジオにかかげ、従来的にもエコロジーを基調としてきたジブリ＝宮崎駿が、じつのところ原発を肯定しているように読めてしまうのである。上記の論理からすれば、原発も、そしてそれがもたらした放射能汚染も、自然であるのだから。

これは、社会にも［　X　］することのできる議論である。社会とはいったい、人間が意図的に、人工的に作り上げたものであるのか、それとも自然なのか。社会のさまざまな単位、つまり家族、地域共同体、国民国家などは、いったい人工物であるのか、それとも自然なのか？　社会一般だけでなく、その中にある制度についてはどうか。たとえば株式市場はどうだろうか。こ

れも、人間の技術によって作り上げられた制度であることは確かだ。しかし、いざあなたが株を買って儲けようとするとして、株式市場は巨大で予測不可能な自然のように見えるかもしれない。

ここでの一般的な問題は、以上のような技術と自然の脱構築の帰結のひとつ(あくまでひとつ)が、人間の労働の隠蔽であるということだ。レイモンド・ウィリアムズの『田舎と都会』の主題の一部はそれであった。ウィリアムズはこの本で古代ローマの牧歌詩から現代のSF作家までを壮大なスケールで論じていくが、その古代ローマの詩人ウェルギリウスの詩にはすでに、「耕作を必要としない土地の呪術的喚起」が見られる。つまり、牧歌の伝統において、田園は労働なしで富を生み出すものとして美化される。また、同じくウィリアムズのエッセイ「自然の観念」(一九七一年)での面白いエピソードを挙げてもいいかもしれない。つまり、「生け垣をとりのぞくことは自然に反する現代科学の狂気の一種」だと言った人物のエピソードである。これらにおいては、本来人間の労働の産物であるもの、つまり人工物(生け垣)が自然だととらえられているのだ。労働は自然の一部としてとらえられ、または自然におおいかくされて、魔術的に富を生み出すものとみなされる。この労働なしで富を生み出す自然のビジョンが長い歴史を持っていて、現代のわたしたちをもとらえていることは、ほかならぬ原子力発電を考えればわかる。原子力が夢のエネルギーであることは、それが労働のないところから富を生み出すという夢を見させたからであった。もちろん、原発が低賃金の被曝労働ぬきでは②カドウ不可能であることは、たとえば堀江邦夫のノンフィクション『原発ジプシー』(一九七九年)と、それを原案とする森崎東監督の映画『生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言』(一九八五年)といった形で語られ、描かれてきた。それにもかかわらず、福島の原発が溶け落ちて人の力ではどうしようもないと思えるような状況に陥ってはじめて、わたしたちはあれを人間が動かしていたことに気づいた、ということは認めなければならないのではないか。

a

さきほど株式市場の例でほのめかしたように、資本主義はみずからを自然として表象しようとする。それは、ウィリアムズが述べたように、労働そして③サクシュの事実を隠蔽する。かつての田園詩が荘園における労働を隠蔽して自然の美のみを表象したように、現代の詩は資本主義的な市場とそこでの労働、競争、サクシュの事実を自然として、もしくは言うなれば第二の自然と

して表象するだろう。

さて、『ナウシカ』がこのようなイデオロギーにどっぷりと浸かった作品だと、わたしは主張しているわけではない。先ほど強調したように、労働の隠蔽は自然と技術の脱構築の帰結のひとつでしかない。自然と技術が脱構築されるというのは、すべてが自然であるということになりうると同時に、すべては技術であるという観念にも帰結しうる。後者は一種の近代主義（モダニズム）である。技術至上主義ということだけではなく、それは、わたしたちが自然だと思いこんでいるものも人間の意図と努力によって育成されてきたものなのであり、したがってこれからも人間の意図と努力によって変えていくことができるという、一種の人間主義でもあるのだ（宮崎駿のイデオロギーを好意的にとらえれば、こちらになるだろう）。

ここではしかし、『ナウシカ』がこのどちらであるかを決定しようとはせず、この作品における技術と自然の脱構築を歴史的に読む努力をしてみたい。じつは、この作品における技術と自然という二項対立とその脱構築は、B普遍的な主題であるように見えながらも、かなり具体的な歴史性をもっているのだ。

『風の谷のナウシカ』は一種のSFであるが、そのSFの系譜を見ると、『ナウシカ』のようなタイプの［　Y　］、つまり「自然環境だと思っていたものが人工であったことに気づく」という型の［　Y　］は初めてのものではないことが分かる。例えば、イギリスのSF作家ブライアン・オールディスの『寄港地のない船』（一九五八年）という小説である。

この小説は、『ナウシカ』を彷彿とさせる民俗学的な部族社会から始まるのだが、最終的にあきらかになるのは、その社会は、プロキオン星から地球へと帰還し、現在は地球を周回している巨大な宇宙船の内部に存在していたということ、さらには途中で登場する巨人族はじつは人間にほかならず、人間を巨人と見てしまう主人公たちは、プロキオン星で罹患した疫病によって変態し、宇宙船に閉じ込められたまま小人化してしまった人間の末裔だった（疫病からは二十三世代が経過している）、ということである。

ここで注目されるのは、マルクス主義文芸理論家フレドリック・ジェイムソンによるこの小説の読解である。ジェイムソンによれば、この小説は読者の「ジャンル的期待」をどんどん裏切っていく。最初は民俗学的世界での冒険もの、つぎにファンタジー

に近づくような奇譚、そしてSF、といったふうに、この小説はジャンルをつぎつぎに変えていく。この形式面と、最終的に明かされる真実が一致しているというのがジェイムソンの読みである。つまりそれは、「人間による人間の操作」にまつわる真実だ。『寄港地のない船』の主人公たちは、地球人に見捨てられ、またナウシカのような改造人間というわけではないにしても、人工的な環境を自然だと思いこんで(思いこまされて)生きている。この作品は、形式と内容の両面が操作というテーマによって一致している。つまり、ジャンルの変更による読者の操作と、小説の内容における操作というテーマが一致しているのだ。

さて、ジェイムソンは以上のようなオールディスの小説の政治性を「反官僚主義」および「反社会主義」であるとする(実際はこの読解にはさらなるひねりが加えられるが、ここでは④カツアイする)。つまり一言で言えば、この作品の「人間による人間の大規模な操作」のテーマは、冷戦リベラリズムだということである。『寄港地のない船』が一九五八年の作品であることをもう一度確認しよう。この作品は、大戦における全体主義または同時代ソ連の社会主義をその極端な頂点とするような官僚主義または管理行政制度を批判し、それを鏡像として当時の西側の自由主義を肯定するのだ。

この冷戦リベラリズムのイデオロギーは、五〇・六〇年代の福祉国家のイデオロギーであると同時に、現在の新自由主義を準備したイデオロギーである。そのイデオロギーは、第一世界の福祉国家が社会主義とは違う、ということを確認するために存在したと言える。また、新自由主義が市場の自由を至上命題とするとして、その陰画は市場を管理統制する国家であり官僚組織であるのだ。ここで、先ほど述べたことを思い出していただきたい。(新)自由主義者にとって市場は自然である。それを、国家の介入によって人工的に操作しようとすることは悪なのである。

『ナウシカ』が『寄港地のない船』と同様の［Y］構造を持ちつつ、同じく人間による人間の操作をテーマとしていることは明白であろう。では、そのイデオロギーの方はどうだろうか。『ナウシカ』もまた、管理統制を嫌うリベラリズムの作品なのだろうか。先に引用したナウシカの台詞のつづきを読むと、そのようにも思える。曰く、「生きることは変わることだ／王蟲も粘菌も草木も人間も変わっていくだろう／腐海も共に生きるだろう／だがお前(「墓所」の主)は変われない／組み込まれた予定があるだけだ」(第七巻、一九八頁)。「組み込まれた予定」を否定するナウシカは、もはや自然を称揚しているというよりはむしろ、官

僚主義的な管理や社会主義的な計画を否定し、フレキシブルな後期資本主義を肯定しているとは読めないか。つまり、ナウシカのメッセージとは、「自然を技術によって操作しようとすることは官僚的（または社会主義的）でだめだ」ということなのである。

そうだとすると、『ナウシカ』における自然と技術の対立（とその脱構築）の意味がずらされることになる。つまり、その場合、技術とは科学技術ではなく管理統制、または官僚制という意味での技術――あるいは生政治（バイオポリティクス）――のことになるのだ。ここで、「生きねば」という命令は、「計画され管理された社会で生きるのではなく、計画されていない「自然」の中で生きよ」という命令へと読み替えうる。もちろん、ここで言う自然はすでに第一の意味での自然ではなく、人工的な自然、いわば第二の自然なのであるが、新自由主義のヨウテイ⑤は、まさにこの第二の自然の人工性を抑圧・忘却し、市場と自由競争こそが人間にとっての第一の自然であり、その自然に還ることこそが、もっとも効率のよい社会なのだ、という観念なのである。

（河野真太郎『増補　戦う姫、働く少女』による。一部改変。）

問一　傍線部①～⑤のカタカナを漢字で書きなさい。

問二　空欄 X ～ Y に入る最も適当な語を、次のア～オのなかから一つ選び、その記号を答えなさい。ただし、同じ記号には同じ語が入るものとする。

X　ア　逸脱　　イ　敷衍　　ウ　構築　　エ　忖度　　オ　強要

Y　ア　サマリー　　イ　パラダイム　　ウ　クリシェ　　エ　プロット　　オ　スクリプト

問三　文脈から考えて空欄 a に入る文として最も適当なものを、次のア～オのなかから一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　労働なき富という夢を見させた原子力発電所は古代ローマ以来の伝統的ビジョンを継承しており、その伝統の強固さゆえに、ノンフィクションや映画によって指摘された原発の実態が問題視されることはなかった。

イ　ウェルギリウス以来の自然観のもと低賃金の被曝労働は自然に貢献すると理解されたがゆえに、原子力発電所を自然とみなす傾向は揺るぎないものとなった。

ウ　原発事故によって労働なしで富を生み出す自然のビジョンの誤りが明らかとなり、それによってむしろ「すべては技術である」という観念の正しさが主張されるようになった。

エ　じつは人間の労働抜きには動かしえないことが明るみになったことで、魔術的に富を生み出す夢の技術とみなされていた原子力発電所の魔術性はむしろ強調されるようになった。

オ　原子力発電所のような、あきらかな技術の産物にも、じつはどこかでそれを自然だとみなすイデオロギーがはたらいており、それゆえにこそ、そこからは労働なき富が魔術のように生み出されると考えられる。

問四　傍線部A「驚くべきひねりを加えることで技術と自然の対立を脱構築している」とはどういうことか。「驚くべきひねり」の内容を明らかにしつつ、六十字以内で説明しなさい。

問五　傍線部B「普遍的な主題であるように見えながらも、かなり具体的な歴史性をもっている」について、次の(i)(ii)の問いに答えなさい。

(i)　「かなり具体的な歴史性」の内容を言い表している表現を本文中から四十字以上四十五字以内で探し、その最初と最後の五字を書き抜きなさい。

(ii)　その「歴史性」は、『風の谷のナウシカ』のどんな場面から読み取れるか。「……場面」とつながるように書きなさい。

問六　本文の内容に合う説明として最も適当なものを、次のア～オのなかから一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　ナウシカによれば、墓所に保存されている胎児は人工的に改造されていない自然のままの存在であるがゆえに、むしろ生命とは言えないものとなっている。

イ　『風の谷のナウシカ』は「すべては自然である」という観念に与している、とは断定されていない。

ウ　市場は人間が技術で作ったものであるがゆえに、われわれは新自由主義のもとで否が応でもその人工性を意識するように仕向けられる。

エ　ジェイムソンが『寄港地のない船』に読み取った政治性は、時代を問わず見いだしうる普遍的なものである。

オ　『風の谷のナウシカ』は、ジェイムソンによる『寄港地のない船』の読解が誤っていることを示す作品である。

問題二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

おおざっぱに言うと日本語は和語（やまとことば）と漢語からなる。これは二重言語状態であるが、日本語の表現の可能性はこれによって大いに広がった。ほぼ同じことを表すのにしばしば二系統の異なる表現があるのだ。たとえば買うと購入する、教えると教育する、腹を立てると立腹する、馬から落ちると落馬する……と挙げだせばきりがない。

これは古来の日本語に、ある時期から漢語が移入されたためであり、漢字がわが国の思想・文化に与えた影響は計り知れない。漢文を読み下し文にして理解するという驚くべき発明もした。漢字に音訓をあてがって自国語としたのだ。

ときと時間の違いをかつて私は次のように述べた。

「とき」と「時間」とでは、明らかに響きが違う。「とき」はやまとことばで、濃淡のある柔らかな縁どりを感じさせ、「時間」は漢語であって、かちっとした明白な輪郭を感じさせる。「とき」は、漢字で「時」と書くよりも、ひらがなで「とき」と書くほうが似つかわしく、逆に、「時間」はかな書きでは締まらない。「とき」には、個人的な親しみがこもっているといえばよいのだろうか。これに対して、「時間」は、社会的な機能を前面に押し出す。（瀬戸賢一『メタファー思考』講談社現代新書）

これはときと時間を例にとって和語と漢語（音読みの翻訳語も含む）の［　　I　　］ことをも示唆した。微妙な意味の差異がいかに両語を分かつのかはすぐにより詳しく見る。

そのひとつの手掛かりとして、『辞苑』と『広辞苑』の各版の時間とときの語義数を比べると、ときの語義数が平均三倍強多い。なぜときの語義数が時間のそれよりもかなり多いのかはすでにおわかりだろう。ときが和語として長年の歴史をもつのに対して、時間は明治以降に翻訳語として成立したにすぎないからだ。ことばとしての年輪の差と言えばよいのだろうか。ごく日常的なレベルにまで両者の違いは及ぶ。たとえば「若いとき」とは言うが、「若い時間」とは言わない。「うれしいとき」や「悲しいとき」

はあっても「うれしい時間」や「悲しい時間」はない。

ときは和語として人に寄り添う。人と一体になってある状況を作る。もちろん主人公は人。「大いなるとき」とはある重大なときだが、その場の人の心臓が高鳴りその胸が膨らむ。ときそのものが大いなるというよりもその状況の全体が大いなる特性を示す。こう言ってもよいかもしれない。ときはここでは状況・場合の意味に近づくと。ひとつの場の形成を意味すると言うべきか。

もう少し例を見よう。

風邪を引きそうなときはすぐに寝るのが一番。

これは次のように言い換えてもほとんど意味が変わらない。

風邪を引きそうな場合はすぐに寝るのが一番。

次の例もほぼ同趣だろう。

万一のときに備えて貯金する。

ときのある用法が場(合)の意味に近づく例を見たが、ときと対照される語ではどうだろうか。ところという表現に注目しよう。「ときとところをわきまえよう」ではときとところがペアを組む。ところも純粋な場所にとどまることなく、しばしば場所と結びついた状況を指す。これを「ときと場合をわきまえよう」と言い換えてもよい。もちろん空間的な場所を表すことを中心とす

るが、つぎの表現ではときの意味に近づいていないだろうか。

駅に着いたところで定期を忘れたのに気づいた。

次の文と比べよう。

駅に着いたときに定期を忘れたのに気づいた。

和語が融通無碍（むげ）であると主張するのではない。もし本当にそうならたった一語ですべての意味が伝わるはずだ。ただ日本語に限らず、すべての人間のことばの意味には中心と周辺があること、漢語の輪郭が比較的かっちりとしているのに対して和語は弾性に富むことに注意を向けたい。ときとところのある用法では意外にも意味が急接近する場合があることを見た。

ではときの意味の中心は何か。

少しゆっくりと考えてみたい。

朝起きて何らかの活動をして寝る。これを繰り返す中でいくつかの同一の現象を見たに違いない。A多の中に一を見る認識は生命あるものにとってきわめて重要だ。晴れの日、曇りの日、雨の日。これらの多数の個々の事例の中でもっとも確実な「繰り返しの一致」（渡辺慧『時間の歴史』東京図書）は、日が昇りやがて沈みまた昇るという反復だろう。

日（太陽）が一日のときの確実な指標となるように、月の満ち欠けはひと月のときのシンボルと見なされる。英語のmoon（月）とmonth（ひと月）は同源であり、ドイツ語のMond（月）とMonat（ひと月）も同様だ。一年の認識はより長期にわたる観測を必要とするだろう。

四季のあるところでは春夏秋冬がときの節目となる。日本では桜花がとりわけ人の心をときめかす。日本語には年の経過を春秋で表す言い方がある。英語なら夏と冬がこの役目を担う。たとえば七十歳の人を a man of seventy winters と言うことがある。苦節七十年の響きに近いだろうか。緯度の高い英国(ロンドンの緯度は日本付近では樺太の中ほど)では、長い冬と短い夏の二つの季節しかないとも言えるからである。英語の春秋にはこの用法はない。

四季よりも長い一年を見定めるのに人は何を注視しただろうか。祭りを手掛かりとしよう。フレイザーの『金枝篇』(岩波文庫)には多数の［ X ］の盛大な祭りが記述されている。［ X ］とは太陽の力が北半球でもっとも衰える日。そのまま衰退してしまえば大変だ。そこで太陽の復活を祈る大きな祭りを①催す。クリスマスも結局はこの異教の祭典と合体した。天空の星の観察も「繰り返しの一致」の確かな証拠となったろう。毎年ほぼ同じ時期に氾濫するナイル川は②沃土を下流域にもたらした。

［ II ］

仏家では食事をするとき(の食事)を斎(とき)と言う。これも繰り返される行為と反復されるときが一体になったものと解釈できる。仏事で参会者に出す食事のことも意味し、そこで行われる法事・仏事も表す。

日常的なときの認識基盤をいくつか探ってみた。それらがすべて線分としてのときであるのは明白だろう。つまり始点と終点が定まったときである。しかし線分はあくまでも直線(あるいは大きな円環)の一部にすぎない。背後に悠久のときがどっしりとひかえる。

B ときの意味の全体を示そう。

(1) 月日の移りゆき。「―の流れ」「―のたつのも忘れる」 ［ 1 ］

(2) 時間のある幅。

㋐ 特定の時間。「たのしい―」 ［ 2 ］

㋑ 暦上の特定の時期。時節。季節。「―の花」「花見[梅雨]―」 ［ 3 ］

㋒ 時代。当時。「将軍綱吉の―」「―は元禄十五年」 4

㋓ 時代のなりゆき。時勢。時流。「―の動き」「―に従う」 5

㋔ 話題にしている時代。その時。この時。「―の人〔話題、首相〕」 6

㋕ 〔古〕一昼夜の時間区分(約二時間)。「半―」 7

(3) 時間の一点またはそれに近いもの。

㋐ ある時点。「子供の―」「―と場合による」「困った―には」 8

㋑ 大事な時点(「秋」とも書く)。「危急存亡の―」 9

㋒ よい時点。好機。「―を待つ」「―にあう」 10

㋓ 〔やや古〕時刻。「―を告げる」 11

(4) 〔文法〕テンス。時制。 12

これは何かある辞書の写しではない。私自身による記述である。必ずしも網羅的とは言えないかもしれないが主要な語義はすべて抽出した。注目してもらいたいのは主要な語義の数が少ない点である(1)―(4)で表示)。また(2)と(3)の主たる語義にその系列に属する㋐㋑㋒などのより細かな語釈をまとめた。一般の国語辞典の語義配列は、一応の基準を設定しているものの結果的には羅列に堕③してしまっていることが少なくない。語釈や用法の表示に関しては近年長足C の進歩が見られるが、語義の切り分けと配列については今後に期待する部分がまだ大きい。

文法用語としての(4)の語義を除くと、ときの意味は(1)の直線、(2)の線分、(3)の点の語義に分かれてその全体が体系的に記述される。頻度的には(2)と(3)の語義が高いが、ともに(1)を前提とする。(1)をバックボーンとしないかぎり、(2)と(3)の各語義はバラバラになってしまうだろう。それらをつなぎ止めて前後関係を固定させるためにも(1)の語義を先頭に配する必要がある。このような意味での先頭の語義を中心義と呼ぶ。(2)や(3)の下位類についても主要な語義㋐を最初に置く。

右のような意味での体系的記述の詳細はここでは述べない。ただ一般的な辞書の語義記述法が『広辞苑』の歴史順(古い語義から順に並べる)と『新明解』の頻度順(現代的観点から頻度の高い語義から順に並べる)に代表される点には少し触れておこう。先にも述べたように、これらの原則を貫くのはそれぞれ困難があり、結果的にはしばしば語義の羅列に近づくのはやむを得ないのかもしれない。それだけ意味のまとまりを体系的に記述するのは一般的に難しい。理論と実践が必要だ。

これはひとつの見出し語が複数の語義をもつ多義語に関して生じる問題である。外国語についても同様だ。たとえば英語の辞典はどうなっているだろうか。The Oxford English Dictionary(オックスフォード英語辞典)は意味のまとまりにも配慮しつつ歴史的な語義配列を行った代表的辞書である。『広辞苑』や『日本国語大辞典』(小学館)はこれに④範を求めたのだろう。他方近年の英和辞典は、主にイギリス系の学習辞典を参考にして頻度順の語義配列を謳う。

しかしいずれの編集方針を採るにせよ、現時点に立って多義語の記述を通観すると意味のまとまりに欠けるという弱点が目につく。歴史的な記述では長い年月の間に意味がしばしば大きく変化する。その筋道を把握することは一般読者にはふつう容易ではなく、また廃棄された語義が先頭付近にあって求める語義にたどりつきにくい。他方頻度順の語義配列は、なるほど必要とする語義にすばやく達する確率は高まるが、全体的な意味のネットワークは破断してしまう。

では第三の記述法はないのか。『英語多義ネットワーク辞典』(小学館)は、見るべき先行辞書もない中で十年の歳月をかけて完成された世界初の英語の多義語辞典である。見出し語数一四二七語。より汎用の辞書としては『プログレッシブ英和中辞典』(五版、小学館)が旧版を全面改訂して、とりわけ多義語の記述を一新した。中心義を先頭に置く。私は両辞典にかかわった。

先のときの記述は英語の多義語の記述法を応用したものである。振り返ると、主要な語義は時間とときでそれほど大きな違いはなさそうに見えるが、ときは派生的な語義が豊かに展開する。たいていは日常への浸透度が高い。他方時間は翻訳語として成立したという背景から派生的には科学や哲学方面の意味を担う。

しかしこれはあくまで辞書(的)記述の範囲内のことである。時間とときの比較はこの後その範囲を大きく超え出て、文化・社会的問題に広がっていく。最終的には人の生き方の選択ともつながるだろう。

(瀬戸賢一『時間の言語学』による。一部改変。)

問一　傍線部①～④の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問二　空欄 X に入る最も適当な言葉を、二字で書きなさい。

問三　空欄 I に入る最も適当なものを、次のア～カのなかから一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　ニュアンスの重複、語の響きの相似を素描したものだが、同時に両語の意味が部分的に重なりながらもうまく住み分けている

イ　ニュアンスの差、語の響きの違いを素描したものだが、同時に両語の意味が部分的に重なりながらもうまく住み分けている

ウ　ニュアンスの断絶、語の響きの隔絶を素描したものだが、同時に両語の意味が完全に重なりながらもうまく住み分けている

エ　ニュアンスの異同、語の響きの類似を素描したものだが、同時に両語の意味が暫定的に対立しながらもうまく住み分けている

オ　ニュアンスの相違、語の響きの異同を素描したものだが、同時に両語の意味が完全に重なりながらもうまく住み分けている

カ　ニュアンスの隔たり、語の響きの差を素描したものだが、同時に両語の意味が暫定的に対立しながらもうまく住み分けている

問四　傍線部A「多の中に一を見る」の「一」の例として適当でないものを、本文に即して、次のア～キのなかから二つ選び、その記号を答えなさい。（順不同）

ア　年輪　　イ　日没　　ウ　天空の星　　エ　月の満ち欠け

オ　斎（とき）　　カ　ナイル川の氾濫　　キ　雨

問五　空欄 Ⅱ は、次のア～キを並びかえると完成する。本文の趣旨に合うようにア～キを並びかえて、それらの記号を順番に書きなさい。ただし、選択肢の「キ」を最後にすること。

ア　一単位分が認識されればその複数の単位も認められる。

イ　この動きに人の行為も加えよう。

ウ　このrosaryの語にはロザリオ（数珠）の語義と並んで、ロザリオの祈りとその祈禱書の語義がある。

エ　ときの経過を知るには何らかの動きがなければならない。

オ　祈禱の回数を指先で繰って確かめるのがカトリック教徒のrosary（数珠）である。

カ　覚醒と睡眠、摂食と排泄、吸気と呼気、心臓の収縮と膨張、労働と休息などはときの経過の知覚のきっかけとなるだろう。

キ　祈りの道具と祈りの行為が一語の中で合体し、広い意味での動きと連動したときの経過が実感される仕組を示す。

問六　傍線部B「ときの意味の全体」について、次の問いに答えなさい。

（i）　筆者が用いた語義記述の方法について、文中で挙げられている他のすべての語義記述の方法と対比させて四十字以内で説明しなさい。

（ii）　「ときを見計らう」という用例は、本文の「とき」の意味の 1 ～ 12 のどこに入るか。最も適当な数字を答えなさい。

問七　傍線部C「長足の」の意味として、最も適当なものを、次のア～キのなかから一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　緩慢な　　イ　緩急のある　　ウ　鈍重な　　エ　無駄がない

オ　急速な　　カ　遅滞ない　　キ　時代遅れの

問八　次の(a)(b)の文は、本文では省略されているが、それぞれある段落の最初の一文である。それはどこか、本文から探し、直後の文の最初の五字を書き抜きなさい。

(a)　遠い遠い昔、私たちの先祖がときの経過を感じた状況を想像してみよう。

(b)　しかし場とは空間よりのことばではなかったか。

問九　本文の内容に合う説明として最も適当なものを、次のア～オのなかから一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　日本では春夏秋冬があり、暑い夏と寒い冬を感じることで、一年が経ったことを実感できる。

イ　冬が長く厳しい英国では、人々が待ち望んだ春の到来が鮮烈に時の流れを感じさせるものである。

ウ　古くから漢語が移入され、日本語と漢語の二系統の異なる表現が日本人が使う言葉を豊かにした。

エ　「とき」と「時間」は、ほぼ同じ意味で用いられるため、これまで、特に使い分けはされてこなかった。

オ　前後の文脈や用法によっては、「とき」は「場合」と意味が変わらない使われ方をすることがある。

問題三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

帝、おりゐたまひて、またの年の秋、A御ぐしおろしたまひて、ところどころ山ぶみしたまひてB行ひたまひけり。備前の掾（じょう）にて、橘の良利といひける人、内にC おはしましけるとき、殿上にさぶらひける、御ぐしおろしたまひければ、やがて御ともに、かしらおろしてけり。人にも知られたまはで歩きたまうける御ともに、これなむおくれたてまつらでD さぶらひける。「かかる御歩きしたまふ、いとあしきことなる」とて、内より、「少将、中将、これかれ、(ア)さぶらへ」とて奉れたまひけれど、たがひつつ歩きたまふ。和泉の国にいたりたまうて、日根といふ所におはします夜あり。いと心ぼそう(イ)かすかにておはしますことを思ひつつ、(ウ)いと悲しけり。さて、「［　X　］といふことを歌によめ」とおほせごとありければ、この良利大徳、

ふるさとのたびねの夢に見えつるはE 恨みやすらむまたととはねば

(エ)とありけるに、みな人泣きて、F えよまずなりにけり。その名をなむ寛蓮大徳といひて、のちまでさぶらひける。

（『大和物語』による。）

問一　傍線部A「御ぐしおろしたまひて」、B「行ひたまひけり」について、それぞれ何をしたのか、わかりやすく書きなさい。

問二　傍線部C「おはしましける」、D「さぶらひける」について、それぞれの主語（動作主）は誰か。本文中の言葉で書きなさい。
同じ答えを二回書いてもよい。

問三　波線部(ア)～(エ)の中に、一つだけ活用を誤ったものがある。その記号を答え、正しく活用させて書きなさい。

問四　空欄 X に当てはまる語を、本文中から書き抜きなさい。またその理由として最も適切なものを次のア～オから一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　「旅」と「足袋」が掛詞になっており、故郷から足袋に穴があくほど辛い旅路を歩んできたことを表しているから。

イ　貧しい人々の見る夢について詠むことで、彼らを顧みてこなかった「帝」ら為政者たちに反省を促す意図が読み取れるから。

ウ　課された題に対し、与えられた題を隠して和歌に詠みこむ隠し題という技法を用いて応えていることが見てとれるから。

エ　序詞の技法を用いることで、字数を整えるとともに自然に指定された語句を導きだしていることが明らかであるから。

オ　「ふるさと」と「たび」は縁語で、内裏の人々からいとわれて旅に出た「帝」の寂しさを代弁する意図を示しているから。

問五　傍線部E「恨みやすらむ」を例に従って単語に分解しなさい。

例　涙／なり／けり

問六　傍線部F「えよまずなりにけり」を現代語に訳しなさい。

問七　本文の内容に合う説明として最も適当なものを、次のア～オのなかから一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　橘の良利は、「帝」の旅に同行して長らく故郷に帰ることができずにいることを歌に詠み、周囲の人々の涙を誘った。

イ　「帝」は橘の良利らと和泉に行った際に寛蓮大徳を名乗る優れた和歌を詠む僧に出会い、その後の旅に同行させた。

ウ　少将や中将は帝の随行をするように命じられたが、それに従わず「帝」に会わずに済むよう策を弄していた。

エ　「帝」の行動は内裏で噂になり、行動を改めるよう進言する使いが再三送られたが、「帝」は聞き入れなかった。

オ　退位した「帝」は内裏を追われ、常に寂しく心細い気持ちになっていたのを、供の者たちが付き従って支えていた。

問八　『大和物語』『伊勢物語』『平中物語』等の作品は、『竹取物語』をはじめとする「作り物語」に対して何とよばれているか、書きなさい。

問題四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合で返り点・送り点を省いたところがある。

閩ノ(注1)大司徒(注2)馬恭敏公在レ山東一日、庭中有レ鶴、雌雄巣ニ於樹杪(注3)一、無レ何、生ニ二雛一。雌雄常ニ留レ一守レ巣、其一遠出覓レ食①。以為常。時方A盛夏、公常ニ命ニ吏卒一謹護レ之。B一日、雄者出而不レ返、旬(注4)余無レ耗。公嘆息、以為レ遇レ害。又数日、雛鳴甚急、視レ之、則雄従ニ南方一飛来、②将至巣。長鳴一声、有ニ樹一枝堕レ地、紅実累累。吏人不レ識、持以白レ公。視レ之則荔(注5)支也。計閩広相距(注6)五千余里、不レ憚(注7)ニ跋渉一而遠取レ之、其愛至矣。亟命梯而送ニ之巣中一。C其雌雄環鳴不レ已、若ニ感謝一云。D

（謝肇淛『五雑組』による。）

（注）
1　閩――福建省の古名。
2　大司徒――官名。ここでは戸部尚書の別称。
3　樹杪――木のこずえ。
4　旬――十日間。
5　荔支――レイシ。またライチ。果物の名。
6　閩広――閩と広。広は広東・広西。
7　跋渉――山を越え川を渡る。

問一　傍線部①「以為常」、傍線部②「将至巣」について、それぞれすべてひらがなで書き下し、それに合うように返り点を付しなさい。なお、書き下しは現代仮名遣いでよい。

問二　傍線部A「方」について、次の問いに答えなさい。
（i）送り仮名を含めた読みを書きなさい。なお、現代仮名遣いでよい。
（ii）（i）の読みと同じ読みをもつ字を、次のア～オのなかから一つ選び、その記号を答えなさい。
ア　始　　イ　即　　ウ　蓋　　エ　卒　　オ　正

問三　傍線部B「一日、雄者出而不返、旬余無耗」について、なぜそうなったのか。本文中の言葉を用いて簡潔に説明しなさい。

問四　傍線部C「五千余里」とは、どことどことの距離をいったものか。解答欄の空欄に当てはまる語を、それぞれ本文中から書き抜きなさい。

問五　傍線部D「之」と同じものを指しているものを、波線部ア～エのなかからすべて選び、その記号を答えなさい（順不同）。

問六　本文の内容に合う説明として最も適当なものを、次のア～オのなかから一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　筆者は、鶴が恩返しをする様子を描くことで、馬恭敏公の優しさを読者に伝えようとしている。

イ　馬恭敏公の配下たちに対する謹厳さと、鶴に対して見せる優しさを対照的に描こうとする意図が見える。

ウ　筆者は、荔支が当時宮廷で食べられていたことを示唆し、鶴の愛の深さを印象づけようとしている。

エ　本文の内容から、馬恭敏公の配下たちにとって荔支が身近な果物ではなかったことが読み取れる。

オ　文中の表現から、この話が実話であり、筆者が馬恭敏公から直接聞いた話であることがわかる。